A. H. Maslow による「自己実現」概念の再定義について
神奈川大学 三島 齋紀
甲南大学 河野 昭三

Maslow 心理学の中核概念である「自己実現(self-actualization)」は、1943 年論文で初出するが、脳損傷患者の行動原理を究明した K. Goldstein の用語を援用し、個人が自分らしく生きるために固有の潜在能力を発揮するという利己的な意味合いをもつものとして提示された。しかし、その後、Maslow は自らの研究対象として、良好健康的人 (Good Human Being: GHB) を指定する中、1943 年時点とは異なる「自己実現」の再定義を行い、1959 年論文では真善美等からなる「Being Values」の追求を「自己実現」の固有であり方とした。この概念変容の根拠となったものは 1945 年 5 月 6 日〜1949 年 12 月 20 日の独自の GHB 調査であり、これを踏まえた 1950 年論文では、課題中心的・自他共存的であること、神経的体験を有していることなどが、自己実現人の特徴として抽出された。これに基づき、1956 年米国心理学会・分科会講演および 1959 年論文であった。

我が国における保長・主任の勤務実態に関する一覧
九州大学 村田 晋也

本研究は、我が国の大学・中小企業の現場を訪れた際に、従業員らが頻繁に口にしていた言葉、すなわち、「自分との上司を見ていると、昇進して責任を背負うという気持ちがなくなる」という旨のコメントに対し、研究者らが強い危機感を抱いたことに端を発している。彼らがこの種の意見をはっきりと外部の人間に対して口にするという事実から、研究者らは、彼らの上司が置かれている状況はどのようなものなのかを詳らかにしたいと考えたことが本研究のスタートとなった。そこで研究者らは、製造・製造・製造・製造等の企業に赴き、ニコチンを用いた様々な実験を行った。本発表は、その調査結果を報告するものである。

デンショバットのキーツキオペラメントにおける距離次元と時間次元の弁別が速さ次元に及ぼす効果
明星大学 小原 健一郎・古野 公紀・茅野 一徳・小沼野 善

あるオペラメントを構成する複数の反応次元において、ある反応次元の強化は他の反応次元に対しても影響を与えるものと考えられる。本研究では、デンショバットを被験体として用い、速さのある 2 反応間により規定される距